大切なファミリーや街の人々、そしてたった一人の息子を守るため、病に伏しながらも立ち上がったキャバッローネ9代目がイレゴラーレとの戦いで命を落としてから二年余りが過ぎた。
自分の弱さが父の死のきっかけを作ってしまったと罪悪感や責任を感じ、始めは父である9代目の忠実な右腕としてキャバッローネに身を捧げてきたロマーリオに全てを任せ身を引こうとしたディーノだったが、そのロマーリオやファミリーの皆、街の人々からの望みもあって、一つの大きな家族とも言うべき大切な人達の元から去ることを思い止まった。
これ以上大切なものを失いたくない。自分のこの手で大切なものを守りたい――
そんな強い思いが彼を変えたのだろうか。
自らの意志で父の跡を継ぐと決意したディーノは、それまでファミリーを継ぐこともマフィアになることも拒絶していたとは思えないほどの成長ぶりを見せていた。
引き続きリボーンから立派なボスになるための厳しい教育を受けつつ、ロマーリオを始めとする部下達に支えられ拙いながらもボス業をこなしていき、その頑張りの甲斐あってかファミリーも生まれ育ったこの街も9代目が健在だった頃の笑顔と活気を取り戻しつつあった。

◆

「ふぅ…これでやっとゆっくり休める…リボーンの奴、相変わらず無茶苦茶なことしやがって」
ディーノはバスルームのドアを開けて廊下に出ると、ミントグリーンのパジャマの袖口から覗く傷だらけの腕に視線を落として深い溜息をついた。
立派なボスになるためには身体能力だけでなく知力も必要だと、夕食の後風呂に入るまでの時間を勉強時間に充てられている。
外国語の勉強――特に日本語や日本文化は興味があるからかやる気もあって覚えも早かったが、数学などは数字が苦手な故に飲み込みが悪かった。
今夜はその中でも特に苦手なファミリー経営学の授業をやると言われ憂鬱な気分で机に向かったのだが、そんな自分の態度に業を煮やしたのだろう。
リボーンは問題集を前にしてもやる気なく鉛筆を弄ぶ自分を爆弾付きの椅子に縛り付けて逃げられないようにし、解答を間違えたり制限時間内に答えられないとそれを爆発させるという強硬手段に出てきたのだ。
ミスする度に爆発を起こされては堪らないと必死に頭をフル回転させて問題集に挑んだのだが、やる気が出ても急に頭がよくなるわけもなく、何度も爆破されて勉強時間が終わる頃には全身ボロボロになっていた。